二〇一三年三月二三日

開きたる本そのままに春愁ふ　満天
模糊として夕日呑みこむ春の海　せいじ
林立の帆柱の空鳥帰る　菜々

二〇一三年三月二二日

春惜しむ千年楠の幹撫でて　はく子
朝凪の湾掠めしは初燕　なつき
語り継ぐ民話の里や花馬酔木　有香
駅名を告ぐ声間遠春眠し　よし子

二〇一三年三月二一日

海風の恋人岬たんぽぽ黄　菜々
傘立てに杖二三本彼岸寺　宏虎
走り根にな躓きそ春山路　百合
大鳥居額縁として春の海　満天
藁屋根の春日たっぷり吸ひ込める　なつき
春暁に残る灯のあり露天風呂　雅流
春昼の路地に焼きたてパンを売る　きづな

二〇一三年三月二〇日

若布屑浮かぶ漁港の生け簀かな　こすもす
艶めくや春の岬の鳶の笛　ひかり
沖うらら行き交ふ船を見て飽きず　はく子
過疎の村なれど今年も初燕　三刀
池の面に遊ぶ雲あり葦の角　宏虎

二〇一三年三月一九日

いかなごの不漁糶人らは無聊　きづな
ビオトープ覆ふ梢に初音聴く　わかば
瑠璃色の池を巡りて青き踏む　うつぎ
白波の一つ一つに春日燦　菜々

二〇一三年三月一八日

手を浸す御手洗川へ春日燦　ひかり
玉の日に山茱萸は黄を弾きをり　満天

二〇一三年三月一七日

校庭の大楠仰ぎ卒業す　菜々
和太鼓のばち打ち揃ひ卒業す　はく子
温かき日差しに伸びる万歩計　わかば

毎日句会みのる選・二〇一三年三月二六日